

## 夏かぜについて

夏かぜは5月頃から夏にかけて流行し、ほとんどは発熱のみで、咳や鼻水などのいわゆる“かぜの症状”がありません。多くはエンテロ属と呼ばれるウィルスによるもので、冬場のかぜとは症状が異なります。

代表的な病気は、手足口病、ヘルパンギーナです。手足口病はその名の通り、手と足と口に水泡ができます。ヘルパンギーナはのどの奥に水泡ができます皮膚の症状はありません。いずれも1～2日の発熱と、のどの痛みのみで治まります。

これ以外にもエンテロ属のウィルスによる病気はたくさんありますが、その症状は、ほとんどは1～2日の発熱のみ、もしくは様々な発疹を伴う発熱です。やはり咳や鼻水はありません。まれには“無菌性髄膜炎”をおこすこともあります。これは、発熱、頭痛、吐き気が長引きますが、数日で自然に

治ります。“化膿性髄膜炎”と異なり軽症で、基本的に後遺症の心配もありません。

エンテロ属のウィルス以外には、アデノウィルスの感染、いわゆるプール熱と流行性角結膜炎（はやり眼）があります。症状は、扁桃炎による数日の発熱と目の充血です。ただしこの病気は、夏に限らず年中見かけるようになってきています。

いずれの病気も特殊な治療はなく、症状に応じた薬のみで対処します。ただし似た症状で、のどの痛みと発熱を伴う溶連菌感染症だけは治療に数日間の抗生物質が必須で、夏かぜと厳密に分けて診断されなければいけません。

おおさき小児クリニック  
院長 大崎 秀